

〔中国の陶磁展によせて〕

定窯の白磁について

中国の宋代の陶磁は今日世界的に高い評価を得ていますが、その中でも定窯の白磁はその代表格であるといえます。定窯はいわゆるアイボリーホワイトの美しい白磁をもって、宋代の名窯の一つと称されていますが、その白磁に関する文献は宋以来、数多く残されており、それらの中でしばしば賞賛の対象とされています。窯址は河北省曲陽県の涇滋村と燕山村にあります。それらが発見したのは故小山富士夫氏で、それは1941年(昭和16年)4月10日のことでした。その時採集され、日本に将来された1,000点以上にも及ぶ陶磁片は、いくつかの経緯を経て、現在東京の根津美術館に一括保管されています。その陶磁片を研究に役立てるために整理、調査が行なわれ、その成果をもとに昭和58年には根津美術館と大阪市立東洋陶磁美術館で特別展「定窯白磁」が開催され、定窯白磁の研究に大きな業績をのこしました。

定窯は唐代の白磁の名窯として名高い邢州窯の影響下で、唐の晩期におこり、元時代に終わったものと考えられています。中国では1957年から窯址の発掘調査が行なわれましたが、その結果物原(ものはら)は下から晩唐、五代、宋の三層に分かれていること、更には近隣地区の窯場との相互関係などが明らかになりました。その後、各地の宋墓から少なからぬ定窯の器物が出土しました。定窯の二つの宋代の舍利塔の基壇、一つは977年、他は995年の造立ですが、それらからは100点以上の完璧で精妙な定窯白磁が発見され、定窯の作品の編年研究を進める上で大きな助けとなりました。それらの内の典型的な作品が11点選ばれて、1973年にヨーロッパと日本で開かれた「中華人民共和国出土文物展」に出

陳されました。特に、995年銘塔基から出土した高さ約60センチの「白磁刻花牡丹唐草文竜口浄瓶」は世を驚倒させたほどの名品でした。宋定窯の御家芸とでもいうべき花唐草文様が片切り彫り風の深い刻花であらわされているのですが、その洗練された意匠や形姿は十世紀末の定窯の完成された様式そのものと言えます。(挿図参照)

ところで、定窯の白磁の施文には刻花、劃花、印花の三種類の技法が用いられています。刻花の技法は南北のほとんどの窯で使われていますが、刻花は宋代前期の主要な施文技法であるといえます。刻花による施文が行なわれるようになったのちに、刻花と櫛掻き文を併用した文様も盛んになりました。これは折枝文か花唐草文などの輪郭線をまず彫り、その次に花や葉の輪郭線内に櫛状の道具で平行複線文を彫り加えるやり方です。

印花の技法は北宋中期に始まり、後期に成熟しました。文様は多くが碗皿の内部に施されますが、構成は緊密で、文様帯は明確に区わけされています。描線は明瞭で、密でありながら整然としているのが特徴です。この施文は金銀器の影響を受けているようですが、定窯の印花磁器は宋代の印花白磁の

白磁印花牡丹文鉢 北宋

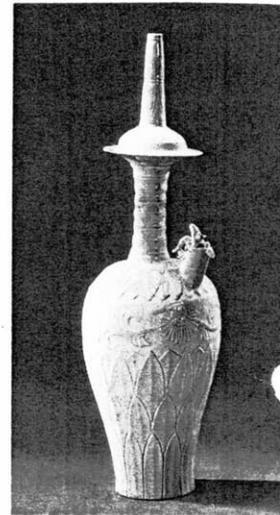
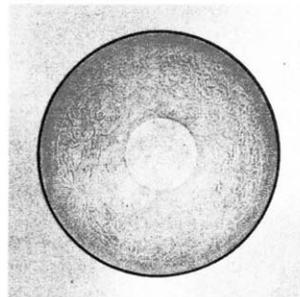


なかで最も代表的なものです。文様の題材は動物、禽鳥、水波遊魚などもありますが、牡丹、蓮華を主とした花卉文が一番多く見られます。

定窯の磁土は珪石が豊富に含まれており、高温で焼成するとこの珪石が針状結晶となって著しく硬度を増します。またこの磁土は可塑性も強く、きわめて薄胎を作ることが出来るなど、大変良質なものです。定窯の碗、鉢に薄作りのものが多いのはまったくこの土のおかげなのです。釉は透明な灰釉で、この胎土によく適合するのが貫入は少ないです。ただ焼成がいくぶん酸化ぎみなので、釉色はかすかに黄味を帯びます。施釉の時にわずかに生じる釉むらのところにこの黄色の流れが見え、これを定窯の涙痕(るいこん)と呼び、一つの景色として賞味しています。

定窯の碗、鉢には口縁を金属の輪すなわち覆輪(ふくりん)でおおったものがよくあります。これは焼成前に口縁部の釉を削り取ったため、焼成後、この素地が露出したところに金や銀の輪を被せるのです。定窯は薄作りを旨としますが、そのためには普通の置き方で高温焼成をしますと、碗の縁が外へ垂れたり切れたりするおそれがあります。そこで考えついたのが伏せ焼き法で、こうすれば口縁が変形することなく焼き上がりまします。しかし、口縁に釉がかかっていますと、そこと窯床がくっついてしまいますので、口縁の釉をはぎ落とさなければなりません。こ

同(部分・見込)

白磁刻花竜口浄瓶 高60.7cm
北宋 995年銘 塔基(河北省定県)出土

のような覆輪は定窯以外にも例えば越州窯の青磁や景德鎮窯の青白磁などにも見られますが、五代から宋初にかけての支配者階級が用いた磁器に多く見られます。無釉のざらざらした膚という欠陥を補う以外に器を豪華に飾る効用もあったと思います。(吳越備史)、(宋兩朝貢奉録) その他の文献には、真磁の目録に、金釧・銀釧・金装定器などの名称が記載されていますが、これらは覆輪のことだと解釈されます。

中国において、白磁は既に唐時代に高い評価を得ていますが、その最高のもものと見做されていなが、邢州窯の白磁です。唐の李肇の『国史補』の中で、「内丘の白磁の甌、端溪の紫石硯、天下の貴賤の区別なく通用される」と記していますが、この邢州窯の白磁にとってかわり、天下の白磁として一世を風靡し、今日にもその名声を保ち続けているのが、まさしく定窯の白磁なのです。(佐藤雅彦著『中国陶磁史』(平凡社)、中国硅酸盐学会編『中国陶磁通史』(平凡社)を主に参考とし、一部は本文をそのまま引用させていただきました。吉田宏志)

季刊 美のたより No.105

平成5年11月12日

発行 大和文華館